

◆「まくた」269号(神奈川県)

「美紗子の一日」 平井文子

「別れた夫に暴力を振われ、血だらけになって泣き叫んでいる最中でも、どこか冷めているところがあった」主人公と三六歳になる「十六年間の引きこもり息子」との二人暮らし。六五歳で現役として働いていて、異邦人のような同僚との不和が語られていく。日常を淡々と描きながら、現在という時代を生きる意味を問いかけてくる作品だ。

ただし、後半のうつ病に対する医師の説明などは、削るか簡略化した方がいい。

◆「豆腐屋の女」 塚越淑行

無駄な文章がほとんど見あたらず、引き締まった好短篇だ。

「影の薄い亭主」と「影の薄くありたい女」が結びつき、亭主が死んで女は一人で豆腐を作り続けた。豆腐作りの詳細な作業工程が描かれているが、そこには作る喜びといったものは感じられない。

ある日、かつての自分のようなどこにも行き場所がない男がふらりと現れる……。とりたててドラマはないが、現代人の心の隙間にしみるような心情が描かれている。

◆「マジフル」 中 絵馬

勤務暦十五年以上という国際線の客室乗務員「ナオ」の疲れと不安が、この作品全体を被っている。妻子のある「木島」との情事が語られているのだが、それはどこか頼りなさがつきまとう。

その木島に今の仕事「積み重ねにならない仕事」だとして転職を勧められ、四十歳を前にしたナオはますます動揺する。ライターとしての木島の自信にひかれ、「望んでいたのはこれだったと

生活を被ってくる。ストーリーテラーとしての力を充分感じさせる作品だ。ただし、「一日は一枚のティッシュペーパーより軽く」といった通俗的な比喩は避けたほうがいい。

◆「湧水」47号(東京都)

「泉」 飛田一歩

仲のよい親娘の家に婿入りした夫は、疎外感に襲われ家を出て行く。その妻である主人公は、まだ出産間もない。とつぜん癌に侵され死の間際にいる父のもとに帰って、病床にいる父の口元に乳首を差し出した。やや芝居がかった設定だが、不思議な透明感がある情景だ。

◆「ザロン・ド・マロリーナ」2号(東京都)

ここは二十代、三十代の書き手を中心だ。「秋の並木道」 和泉あかね

この作品は表面を流れる日常から、川底に沈んでいるイメージをひとこまひとこま拾いあげるように浮上させている。

母の死によって「綿菓子の上を歩いているようなフワフワした」日常から、「母の死を身ごもったわたし」は思い出したくない過去に向き合う。幼い頃出て行った父。母が交際していた藤枝氏。藤枝氏の娘にいじめられたこと、そして自分の娘が「藤枝さんと同じ灰色の瞳」からくる懷疑。

弔問に現れた藤枝氏との面会。それは母へのレクイエムであり、「わたし」の過去からの解放を意味するはずのものだ。この小説は、イメージが先行し、事実の世界が後から追いかけているといった作り方が特徴だ。

◆「カプリチオ」34号(東京都)

同様な書き方をさらに強調した作品があった。

思いながら」も、ナオの孤独は癒されない。

かつて華やかだった国際線のスチュワーデスという仕事、年齢を重ねるごとに肉体的にハードなわずらわしい仕事に転化していき、重荷と感じられてくる。その悲哀感が、男との性交渉を通じてよく描出されている。そしてそれは、同年代の都会の独身女性の孤独にまで通じていそうだ。

◆「狐火」15号(埼玉県)

「畑の果実はだれのもの」 相川さやこ

この作品は、軽妙な語り口で深刻に陥りそうな題材を笑いの世界へと引きあげてくれる。題材は現在の同人誌に多い、定年後の夫婦の話である。

定年再雇用の後、「家計はいつさいおれが預かる」と夫が宣言。「一部上場会社の労務部長まで勤めたことが、唯一の自負で、なにかを管理しなくては生きていけない習性になってしまった」夫を妻が巧みにコントロールしていく物語だ。それは、古典落語を聴いているような味わいがある。同人誌で、時にこうした楽しい小説に出会うのもいいものだとおもった。

◆「風の森」14号(東京都)

「林檎の傷」 遠矢徹彦

重度身体障害者施設の在園者と職員、そして「青年時代にふとしたことから飛びこむことになった障害者運動を率いて、役所の官僚どもにこの施設を強引に造らせた」園長との人間関係が描かれている。それは、いささかパロディ化されている。

元改革者であり、現在権力者である園長が、無頼的な在園者に対して「福祉の花園をあらすもの」として園内の広報紙に「檄書」と題する一文を掲載した。これは自分への面当てだと言っている。

「三月のメリーゴーランド」 玉置伸也

動めていた会社に辞表を出し、のんびり過ごすはずだった「三十二歳の誕生日を迎える私」が、「自分でも驚くほどの不調に陥り込んだ」。「本当に怖いのは、空白だ」という言葉が象徴になって物語は進んでいく。ここでも人物の存在感は希薄で、「オシラサマ」というイメージだけが先行する。

かつて文芸評論家の磯田光一が論じたように「イメージが現実を代行するような神話のシステムが、いまやいどむべき現実としてあらわれる。」

「左翼がサヨクになるとき」ということなのだろうか。そしてこれらの作品は「実在よりも象徴によって人が動かされる」時代の反映ということなのだろう。それは、ブランドやランキング、あるいは話題性に消費行動が集中するといった現象に典型的にあらわれている。

◆「群系」26号(東京都) 特集「大逆事件と文学」

この特集は、十名の書き手が各ポジションで論考し、それがハーモニーとなつて、百年前の一九一〇年の世相を見事にあぶりだしている。大逆事件は、文明開化を経たばかりの日本の近代の浅さを象徴する事件だった。

欧米留学体験によって、日本に近代社会というものはないことを痛感した森鷗外、夏目漱石、永井荷風がこの事件をどのように受けとめ表現したかは、興味深い。あるいは、若き佐藤春夫がこの事件からショックを受け、どのように思考変換したかまで詳細な資料から論考されている。

ちなみに、政治思想史学者の丸山眞男は「天皇制による国民的強制的同質化過程の進行を無視することはできない。それは直接政治的には自由民

た在園者スギオカの葬儀に、赤子を抱いたチャームィングな女性が現れる……。

語り手である、園の職員である「木戸」は、園内の様子やスギオカの虚言癖のことを語っていく。赤子を抱いた女の出現によって、現実と非現実との境界が曖昧になっていく。そしてスギオカの存在が生き生きと蘇ってくる。こうして、この作品はスギオカへのレクイエムだということがあざやかに伝わってくる。

◆「相模文芸」21号(神奈川県)

「ゲン」 林 光子

これはサスペンスドラマみたいな筋立てだ。恋する人を妻子ある男に奪われ、その恋する人が出産し、その赤子を子供のできない正妻に奪われ、その後その人は事故死した。主人公塚原はそれを自殺と察し、復讐を決意する。舷が管理を任されている別荘に、車がスリップし、池に落ちたという男が現れた。その男こそ、復讐の相手だった……。

始めは古臭いドラマの印象だったが、次々と展開していく話に、だんだん引き込まれていった。

ややもすれば通俗に陥りそうなストーリーだが、かろうじて支えているのは、作者の善意を信じる気持の強さだろう。ただし、細部の表現にもう少し気を配ってもらいたかった。

◆「素粒」8号(富山県)

「ゆるやかな悪意」 若栗清子

幼なじみがある日から離れていき、別なコースを歩んでいくのだが、お互いの意識がからみあい、激しく憎みあうようになる。

この「ゆるやかな悪意」の象徴するものは、全

権運動とくにその左派の弾圧からはじまって、陰惨な大逆事件に終わっているし、(中略)その際一貫して天皇制国家から異質的なものとして排除される傾向にあったのは、プロテスタンティズムのある要素と、ラディカルな民主主義およびその脈を引く無政府主義、社会主義の思想と運動であった。」(明治時代の思想)と分析している。

◆「習志野ペン」91号(千葉県)

コミュニティとしての同人誌

掲載されている「行事予定表」を見ると、驚くことに年間四回継続的に発行し、そのつど編集会議、合評会が開かれてきたらしい。内容は、身辺的な短いエッセイを中心に三十名ほどが投稿している。ここでは、まず、参加することに意義があるといった精神がうかがわれる。

身近なコミュニティが崩壊し、インターネット上のコミュニティが盛んになってきた現在、ひとつのコミュニティとしての同人誌の役割が大きな意義を持つてきたと感じさせるものだ。「習志野ペン」のような同人誌の存在が、これからの新たな同人誌の大きな流れになっていくのではないか、そんな予感を感じさせられた。

《今回の優秀作》

「美紗子の一日」 平井文子 「まくた」 269号

「豆腐屋の女」 塚越淑行 「まくた」 269号

「林檎の傷」 遠矢徹彦 「風の森」 14号

《今回の準優秀作》

「畑の果実はだれのもの」

相川さやこ 「狐火」 15号